

I インTRODクシヨN: 聖書の世界観(罪を中心に考えた場合)

- (1) 神は、万物の創造者であり、唯一であり、全能である(黙示録 4:11)
 - ① 完全に聖であり、正しく、愛に富む
- (2) 神はアダムに自由意思を与えたが、アダムは罪を犯し墮落した(ローマ 5:12)
 - ① それ以来、人は生まれながらにして罪人
 - ② 人が死ぬのは罪が原因
- (3) 神が罪に対する基準は厳しく、他人の所有物を欲しいと思っただけで有罪(出エジ 20:17)
 - ① 有罪の状態のままでは、人は罰せられ全員が地獄に行く
- (4) 罪が赦される唯一の方法はイエスの身代わり(贖罪)を信じること(1 コリ 15:3、1 ヨハネ 2:1)
 - ① 信じた人は、神から罪が赦されたので天国に行く(救い)
 - ② 罪の赦しは無条件で一方向的である
 - ③ この罪の赦し(救い)は一度与えられたら取り消されない
- (5) 人は罪が赦されても、罪(の性質)は残る(1 ヨハネ 1:8)
 - ① 信者になったからといって、聖人になるわけではない
- (6) サタンとは「訴える者」や「敵対者」という意味
 - ① サタンは人を「有罪」だと神に告発する(黙示録 12:10)
 - ② サタンはどこにでも現われる
 - ③ サタンは、優秀で能力があり、どんな方法でも使う(天使にさえなりすます)
 - ④ サタンは執念深い(熱心で真面目で実行力がある)
- (7) サタンは神に敵対している
 - ① しかし、神はサタンの悪をご自身の計画実行に利用されることがある(2 コリント 12:7)

II 二人の主要登場人物が示しているもの

- (1) ジャン・バルジャン: 人の罪を示す
 - ① バルジャン性: 罪の性質
 - ② バルジャン個人: 人間としての彼自身
- (2) ジャベール警部: サタン(悪魔)を示す
 - ① バルジャン個人の中の罪(バルジャン性)を追い続け明らかにする
 - ② 彼がサタンというよりも、サタンの使い(悪霊)や、サタン性が具現化した存在
- (3) レ・ミゼラブルとキリスト教
 - ① 聖書の本質を鋭く描いた作品
 - ② 単にキリスト教的文化を背景にしただけの西欧の小説ではない
 - ③ カトリック教理の悪影響は少なく、懺悔や聖体拝領(聖餐)の記述もない
 - ④ プロテスタント的視点の評価に耐えうる作品

Ⅲ ジャン・バルジャンの生涯の時代区分(6つの時代と5つの転換点:明確に区分可能)

(1) 時代区分 1:ジャン・バルジャン時代(0才~46才)

- ① 名前:ジャン・バルジャン
- ② 状況:貧しい農家出身、両親を幼い時に亡くす
- ③ 罪:悲惨な人生
 - ・1つのパンを盗み 19年の投獄、どんな罪でも永遠の裁きの象徴
 - ・バルジャン個人をバルジャン性(罪の性質)のみが支配
- ④ 世の中に対する恨みが最大限の状態を出獄(参考画像1)
- ⑤ 問題:救われる必要がある

(2) 転換点 1:回心(46才)

- ① ミリエル司教との出会い
 - ・司教は自然体であり、世間体を全く気にしない、慈善活動に明け暮れる
 - ・誰に対しても同じ態度、誰にでも銀の燭台を差し出す人物
 - ・心、言葉、行動が一致、これは非常に難しく稀である
 - ・同じ姿勢の人物がもう1人いる ジャベール
- ② この出会いは偶然ではない(ユーゴーか神が計画し実行)
- ③ 最大の転換点:回心、義認、救われた、新生体験、ボーンアゲイン(参考画像2)
 - ・イエス・キリストとの個人的な出会い、罪の赦しを受けた
 - ・彼の中にバルジャン性(罪の性質)と聖霊(聖い性質)が存在

司教は彼のそばに腰を掛けて、静かに彼の手に触った。「あなたはあなたがだれであるかを私に言わなくてもよかったです。ここは私の家ではなくて、イエス・キリストのお家です。この家の戸ははいつて来る人に向かって、その名前を尋ねはしません、ただ心に悲しみの有る無しを尋ねます。あなたが苦しんでいられ、飢えと渴きとを感じていられるならば、あなたは歓待せられます。そして私に札を言っははいけません、…ここは私の家というよりもむしろあなたの家です。すべてここに在あるものはあなたのものです。」

(第1部 第2編 3より)

司教は彼に近寄って、低い声で言った。

「忘れてはいけません、決して忘れてはいけませんぞ、この銀の器は正直な人間になるために使うのだとあなたが私に約束したことは。」

何も約束した覚えのないジャン・バルジャンはただ茫然としていた。司教はその言葉を発するの**に強く力をこめたのである**。彼は一種のおごそかさをもってまた言った。

「ジャン・バルジャンさん、あなたはもう悪のものではない、善のものです。私が購(あがな)うのはあなたの魂です。私はあなたの魂を暗黒な思想や破滅の精神から引き出して、そしてそれを神にささげます。」

(第1部 第2編 12より)

(3) 時代区分 2: マドレーヌ市長時代(46 才～54 才)

- ① 名前: マドレーヌ市長(地方都市)
- ② 身分: 成功した企業家であり、地方行政トップの市長
 - ・目立つことを恐れていたため、望んだ身分ではない
 - ・バルジャン性(罪の性質)を必死に隠す生き方
- ③ サタン(ジャベール)が忍び寄る
 - ・フォーシュルバン爺さんを、馬車の下から救出し疑われる(参考画像 3)
 - ・パリ警察に告発
- ④ 問題: 律法主義的な信仰生活
 - ・頑張っ、無理して、善行を行っている状態(なりたての信者にはよくあること)
 - ・善人でなければならないというストレス(自然体の司教の善行との違い)
 - ・他人からの評価は高いが、やがて破綻してしまう危険性が高い
 - ・孤独な生活、愛を知らない

(4) 転換点 2: 裁判(54 才)

- ① シャンマティユー事件(誰かがバルジャンと間違えられて、裁判にかけられる)
 - ・最大の疑問: 私は誰なのか? Who am I? (参考画像 4)
 - ・悩む、マドレーヌ(善)かバルジャン性(悪)か?
 - ・葛藤: 1 日にして白髪
- ② 自白・証言(参考画像 5)
 - ・バルジャンの自発的なものではない
 - ・彼は意識もうろうの状態 彼が言った、サタンが言わせた、神が言わせた
 - ・彼の信仰は、いまだ迷いの中にある
- ③ バルジャン性
 - ・一度表明(告白)するが、また隠す
- ④ ジャベールが襲いかかる
 - ・「お前はバルジャンだ」、「罪人はいつまでたっても罪人」(参考画像 6)

「天国のうちにとどまって悪魔となるか！ あるいは、地獄に下って天使となるか！」

どうしたらいいか、ああ、いかにしたらばいいのか？(第 1 部 第 7 編 3 より)

「もうマドレーヌさんも市長さんもないんだぞ。泥棒がいるだけだ、悪党が、ジャン・バルジャンという懲役人が。そいつを今俺が捕えたんだ。それだけのことだ。」(第 1 部 第 8 編 4 より)

(5) 時代区分 3: パリ前期時代: 修道院時代(54 才～60 才)

- ① 名前: ユルティーム・フォーシュルバン
- ② テナルディエの宿屋からコゼットを救出し家族に
- ③ 近寄るサタン(ジャベール)

- ・ゴルボー屋敷は古く目立たない安アパート
- ・ここにバルジャン、ジャベール、またマリウス、テナルディエ一家が居住
- ④ プティ・ピクピュス修道院
 - ・神による守り、今回は2度目の保護、1度目はミリエル司教の司教館
 - ・フォーシュルバン爺さんに助けられ、弟になりすます（参考画像7）
 - ・追跡の手が及ばない、コゼットの教育にも最適、まさに理想の環境
- ⑤ 愛を知らない状況の改善
 - ・コゼットとの愛と信頼が2人を共に成長させた
- ⑥ 問題:最愛のコゼットに自由意志・自由選択権がない
 - ・コゼットに修道女の人生を押し付けていいのか？

彼は、生涯の二つの危機に際して相次いで自分を迎え取ってくれたものは、二つの神の住居であったことを考えた。第一のものは、すべての戸がとざされ人間社会から拒まれた時に彼を迎えてくれ、第二のものは、人間社会から再び追跡され徒刑場が再び口を開いた時に彼を迎えてくれた。第一のものがなかったならば、彼は再び罪悪のうちに陥っていたであろう。また第二のものがなかったならば、彼は再び苦難のうちに陥っていたであろう。(第2部 第8編 9より)

(6) 転換点3:修道院を去る決意(60才)

- ① タイミング:フォーシュルバン爺さんの死
- ② もっとも尊くかつ危険なものをコゼットに与えるために、修道院から外界に出た
 - ・コゼットに自由意志・自由選択権を与えた
 - ・母のファンティエヌと同じように間違った人生を選んでしまう危険性
 - ・神がアダムに与えた状況を連想、エデンの園(主の園)、追放
- ③ 自主的な転換点
 - ・これまでの転換点は外部要因だったが、今回は自ら選んだもの

(7) 時代区分4:パリ後期時代(60才~63才)

- ① 名前:ユルティーム・フォーシュルバン、またはユルバン・ファーブル
- ② 状況:葛藤や苦難の連続
 - ・コゼットとマリウス(ほぼストーカー)の出会いと恋
 - ・マリウスを毛嫌いするバルジャン
 - ・ゴルボー屋敷待ち伏せ事件(テナルディエの暗躍)
- ③ 着実に近寄るサタン(ジャベール)
- ④ 問題:コゼットの恋

(8) 転換点4:動乱(63才)

- ① 六月暴動:1832年6月パリ、王政打倒の暴動、フランス革命の余震
- ② 敵のようなマリウスのために命を投げ出す決心、コゼットのため

- ・マリウスがバリケードで死ぬと聞き、ほっとする
- ・しかし、明確な決意によりマリウス救出を選択
- ・コゼットの恋の成就

③ ジャベールの解放 (参考画像 8)

- ・逆にジャベールに自分を差し出す、逃げない
- ・それは自発的なもの、明確に表明(裁判の時と違う)
- ・隠れるから探し出す、逃げるから追う 逃げ隠れなく出頭したら…
- ・サタンはもう手が出せない
- ・ジャベールの死、バルジャンを追い回し、訴える理由が消失

「ジャベール警視、」と彼は言った、「私は君の手中にある。それに今朝から、私はもう君に捕えられたものだと自分で思っていた。君からのがれるつもりならば、住所などを教えはしない。私を捕えるがいい。ただ一つのことを許してもらいたい。」

…

「君はここに何をしてるんだ、そしてその男は何者だ。」

彼はもうジャン・バルジャンをきさまと呼んではいなかった。(第5部 第3編 9より)

(9) 時代区分 5: 人生の最終決着(63才～64才)

- ① 名前: ジャン・バルジャン
- ② 老年: 最期が近い
 - ・コゼットを手放す決心、マリウスとの結婚、別居
 - ・体は衰弱、しかし精神や霊は健全でふっきれている
- ③ 私はバルジャン: マリウスに対しても告白
 - ・バルジャンの自発的な告白、裁判の時と違う (参考画像 9)

(10) 転換点 5: 死(64才)

- ① 肉体の死
 - ・「ジャン・バルジャン」として穏やかな死を迎えた
 - ・死は、アダムの罪の結果
- ② コゼットとマリウスがバルジャンの臨終に間に合う
 - ・二人は実親(ファンティーヌとボンメルシー大佐)の死に目に会えなかった
 - ・実親の想いが義父の臨終への立ち合いによって成就

「彼女がきてくれたことは、神が親切である証拠だ。」

「お父様！」とコゼットは言った。(第5部 第9編 5より)

(11) 時代区分 6: 永遠の秩序 天国の場面

- ① 苦難・貧困・困窮から永遠に解放 (参考画像 10)

- ② 天国にジャベールの姿はない(自殺したからではない)
- ③ バルジャン個人はバルジャン性(罪の性質)から解放され栄化

IV 結論:レ・ミゼラブルが解き明かす3つの真理

(1) 真理1:この世はレ・ミゼラブルである

- ① 原題「Les Misérables」は、「悲惨な人々」「哀れな人々」「ああ無情」という意味
 - ・世の中は無情、不条理、不公平、貧困、病、苦しみ、悲しみに満ちている
 - ・各種の格差:貧富、家庭環境、才能、肉体、容姿、政治体制、景気など
- ② アダムの罪の結果
 - ・社会正義の実現をユーゴーは望んだという見解
 - ・もしそれが正しければ、小説はマドレーヌ市長で終わるはず

(2) 真理2:神は公平(神に対する健全な認識)

- ① この世は、レ・ミゼラブルにもかかわらず、神は公平で恵みに満ちている
 - ・人間の視点では不公平、不公正に見えるかもしれない
 - ・原因は、神がないからではなく、人間の罪による
 - ・レ・ミゼラブルな状況は不信仰のしるしではない
 - ・また、神から見放されていることのしるしでもない
- ② 地上生涯だけで人間は終わらない

「神様はこの上もなく公平ですよ。」と私の兄は答えました。(第1部 第2編 4より)

「万事が望みどおりにならないからといって、」とジャン・バルジャンは言った、「それで神を恨んではいけない。」(第5部 第9編 5より)

神は不公平な方ではありません(ヘブル書 6:10)

(3) 真理3:聖書的な自己認識

- ① 私は罪赦された罪人(自分に対する健全な認識)
 - ・サタンが人を追求し告訴するのは、罪から逃げ、隠そうとするから
 - ・人間の努力には限界があり、自力救済は不可能
- ② 神からの一方的な恩寵にすぎない
 - ・「私は罪人」→「私は罪赦された罪人」という自己認識
- ③ 義認の瞬間に古い自分は死ぬ
 - ・しかし罪の影響は残る
 - ・人生を通じての葛藤(聖化)が必要
- ④ 私はバルジャンだという告白が私たちにも必要

- ・私 anymore バルジャンでないが、バルジャンでもある
- ・罪赦されたが、罪の性質は残る
- ・やがて完全に解放され栄化される

「レ・ミゼラブル」の日本語翻訳は豊島与志雄訳を使用。

<https://www.aozora.gr.jp/cards/001094/card42600.html>

日本語聖書は「聖書 新改訳 2017 ©2017 新日本聖書刊行会」を使用。